

おっぱい大好き



おっぱい大好き
おっぱい大好き
おっぱい大好き


X RARE+



RIN SHIBUYA 
 

街で偶然目にとめた私を、Pはアイドルとしてデビューさせてくれた。
どこにでもいる、ごく普通の女子●生。そんな私がこれから
どんな世界に進んでいけるのだろうかワクワクした。

けれどそこには、想像ほど甘くはない現実が待ち受けていた。
毎日毎日、どこかの偉いおじさん達に挨拶回りをする日々。
なんとか仕事を取り付けようと、Pは何度も何度も頭を下げる。
苦手な愛想笑いで私の顔はひきつり、時折感じる下卑た視線に必死に耐える。

それでも私を一生懸命売り込んでくれるPの姿に、なんとか応えたかった。
そんな時、ある社長が私にだけ聞こえる小さな声で言った。

「——大きな仕事がほしいなら、相応の対価が必要だとは思わないかい？」



「やあ、待っていたよ——凜ちゃん」

がちやり、と開いた扉の向こう。
スーツを着た男の言葉と視線に心臓がどくんと跳ねて
身体が少しだけ強張るのを感じた。
自分がこれから何をするのか…否応なく意識してしまう。

「ああ、心配しなくても大丈夫だよ。
今日のことは誰にも言わないであげるから」
「…当然でしょ」

今はほとんど使われていない倉庫の一室に
制服を着た女子●生とスーツ姿の男。
そんな異質な空間で、緊張する私を見下ろしながら
男は下卑た笑みを浮かべていた。
じろじろと胸や太ももを値踏みするような視線に
耐え切れず、私はふいっと視線を逸らす。

「…それで、何をすればいいの？」
「ふむ…君は本番は厳禁、だったかね…まあいい。
まずはそこにかがんで、コレをしごいてもらおうかね」

そうして男はおもむろに——ズボンと下着をおろした。

「—!?!」

思いがけずに息をのむ。男のソレが、そこにあった。

「おや、コイツを見るのは初めてかね？」

「…っ」

私だって、そういう知識くらいはある。けれど、現実に見にしたのはこれが初めてで。赤黒くて醜悪なソレは、酸い臭いを放っていた。

「これはいい。遊んでいそうな見た目とのギャップがたまらんな」

「や…ッ」

肉棒をこちらに突き出すように男の腰が動くたび、嫌悪感から反射的に体が逃げてしまう。

「どうしたのかね？はやくしてくれたまえ」

「う…」

今更怖気づいたなどとは言い出せず。言われた通りにしなければ帰れないし、来た意味もない。逆らおうものなら、それこそどうなるか——その恐怖から、私は恐る恐る男の肉棒をしごき始めた。

「ふむ、では…お次は口で舐めてもらえるかな」

「え…？」

突然の一言で、意味よくがつかめなかった。

「な、舐め…？」

「フェラチオだよ。知ってくらいはいるだろう？」

「—!？」

ただでさえ生理的に受け付けないコレを、口で——
考えただけで鳥肌が立った。

「…む、ムリ…それは」

「おやおや…それは困ったな。

…どれ、君からも言い聞かせてやってくれないか」

「…え？」

男の声に招かれた人物に、ふと意識が切り替えられる。

ぬちゅ
くちゅ

「やあ、凛ちゃん。久しぶりだね」

「!あ…アタ、なんで…ここにっ!?!」

「宣材の撮影以来かな？」

「やっぱり俺の目に狂いはなかったんだね」

見覚えのある男——とあるカメラマンだった。
露骨にローアングルから撮ろうとしたり、
いやらしい姿勢を取らそうとしていたのを覚えている。
そんな男がどうしてここに——
その理由は、男とカメラマン両方の言葉から知れた。

「いやはや、君から話を聞いた時は正直疑ったが…

これは期待以上だよ」

「でしょう？素質があると思ったんですよ、この娘には」

「!!っ…まさかアタが…」

そう——このカメラマンが変態社長をそそのかしたのだ。



「…ていうかちよっ、カメラ!？」

気付くと男はハンディカムを抱えていた。

「いや～実際にいい画が撮れてるよ。

『現役JKアイドル、放課後の情事』ってね——

あ、ここで止めたら動画がどうなるかは…分かるよね？」

「……最、低…ッ」

「ハハハ、君もぬかりがないな。

さて…凜。口をあけて舌を出しなさい」

なにが、どうして、どうなって。そんな答えのない、
ただ現実しかない問いで頭の中がぐるぐるになって。
焦りや不安で考えもまとまらぬまま、
私はもはや命令に従うしかなくなっていた。



「ん……ちゅ、っ、くちゅ…」

「ああ…いいね、初々しいのが更にそそる。

そう…裏の筋までしっかりとな」

「ちゅ…くぶっ…ん…ふうあ」

てらてらと濡れた肉棒を舐め上げるたびにそれは私の唇を濡らし、時々ぴゅると飛び出る先走り液に頬や鼻筋が汚される。

「制服をはだけたJKアイドルがフェラしてるなんて、まるでアダルトビデオだ…ほら、カメラの方も向いて」

男達はどんどんエスカレートし、胸は乳首まではだけ、下着も脱がされてしまっていた。

男の肉棒は興奮を抑えきれない獣のように、硬さを増していた。

ちゅっ、
ぴゅっ、
ちゅっ、

「はあ、はあ…。社長、僕ももうその…

チンポがギンギンに勃っちゃってまして」

「ああ…今回はお手柄だからね、君も楽しんでもらわねばな。

—では、少し急ぐとするか。凜、歯をたてるんじゃないぞ」

「…ふえ…？」

男がそう言い放った次の瞬間。

—ぐぶっ！！

「—ッ！！？」

男の肉棒が私の口の中に向けられたと同時に、勢いよく押し込まれた。

「んむっ、ン~！！」

ぬぶぶ、と押し入ってくる肉棒は熱くて大きい。
反射的に逃げようとするも、頭をしっかりと押さえられてしまい。
半ばまで肉棒を押し入れると、男は容赦なく腰の動きを開始した。



「んっ、くふ…むっ!!」

唇から唾液が零れて、つつと首筋を汚す。露わになった胸が激しく前後する男の腰に合わせてぷるんぷるん揺れた。

「少し強めにいくからな…苦しくても我慢するんだぞッ」

「ん、ぶッ……!ん、くふ、んんッ、んぐうっ!!」

男の腰の動きがだんだんと速くなる。肉棒が私の口内を犯し、掻き出された唾液は粘質な音を伴って唇の回りを汚していく。

「んぶ!ふむッ…!ふぐうーッ!!」

口の中を押し広げるかのように乱暴に蠢いたかと思うと、喉の奥深くまで一気に突き入れられる。酸素を奪われ身体中が熱いことに気づくが、どうすることも出来ない。強く突かれるたび反射的に涙が零れ、頬を濡らす。

そんな私の姿にますます興奮するかのように、男の動きは大きく速くなっていった。

「ああ、実に良い声で鳴くねえ…可愛いぞ、凜っ…!!」

「~~~~ッ!!」

倒れそうになる身体を男の体でかろうじて支え、奪われていく酸素を鼻や口の隙間から取り入れようとして喉を震わせる——その一番奥で、男の肉棒がひときわ大きく震える。

「ああッ…射精る、ぞおっ!!」

「んぶらっ、ツツツツ!？」

びくん!!と大きく震えた肉棒は、
その動きに合わせて私の喉奥まで突き入れられる。
むせそうな衝撃とともに震える喉めがけて
熱いナニかが男の肉棒から放たれた。

びゅるるる、ドピュルルッ、びゅくっ、どぶっ、どびゅっ。
二度、三度、四度、それ以上。

「んぐ…!ふ…むっ」

男の肉棒が脈動するたびに、
熱いナニかが私の喉と口の中を満たしていく。
気持ち悪い感覚とともに、男の放ったものが
奥へと流し込まれ…私はその全てを飲み込んだ。



ぬほお、と。
男は唾液とナニかでヌラヌラと濡れた肉棒を私の口から引き抜く。
つつつ、と唇とつながった白い粘液の橋がぷつりと切れた。

「っ……ふう。なかなか出たな…。
ほら、残ったのも舐めて綺麗にきなさい」

「は…っ…はあ、はっ…」

酸素を求めて荒く呼吸する。
肉棒の先から熱とともに白く粘ったナニかが零れ落ちて、
生臭い匂いとともにそれが男の——精液だということを理解した。

ほ
ほ
ほ
ちゅぽん

「ん、……ちゆく、ちゆる……れ、るう」
「そうだ…上手いぞ、凜」

男の言葉に抗う気力すらなく、精液と唾液にまみれた肉棒を差し出されるがままに舐めていく。

「——っ、そうだ。凜ちゃん、次はこれつけてよ」
「は、んあ……？」
ふと、カメラマンの男がごそごそと何かを取り出した。

「……っ」

カチャカチャと首につけられた革状のものと合わせ、それが犬耳と首輪であることを理解した。

「ああ、やっぱり！絶対に似合うと思ったんだ。

これで凜ちゃんも、立派な雌犬だね」

「ハハ、君も好きモノだな…実に素晴らしい。

飼われているのが一目でわかる」

「でしょう？ああ…

こんな姿の凜ちゃんを好きにできるなんて——！」

男の肉棒を舌で舐め上げていた私の頭を今度はカメラマンの男が掴むと、一気に彼の肉棒を突き插れた。



「ん、ぐらッ?! んんっ、ゾゾ ~ッ!!」

「キミを一目見た時から、こうやって犯してやりたいと思ってたっ…!
生意気な目を屈服させて、その口にねじ込んでやりたかったッ!!」

「んぐッ! んっ、あゝ、ぶッ、う~~ッ!!」

無理矢理に犯される口の中が反応し、過剰なほどの唾液があふれていく。
カメラマンの男は肉棒の根元まで押し込んで、ただ乱暴に腰を蠢かす。

「これ、こっちの手も休むんじゃあない。
そうだ、いいぞ…まだまだ終わらんからな…っ」

一度果てた男の肉棒もまた硬さを取り戻し、より一層大きくなっていた。
それに同調するように、太い肉棒がさらに口内の深くに押し込まれる。

「んぶッ、んぐッ…! ん' ズ …じゅぶぶッ!!」

留めきれなくなった唾液がだらだらと口の端から零れ出て、
男の肉棒の挿送の助けとなって動きを早くした。

「ああ、いくッ、いくぞッ。一番奥で飲み込め……ッッ!!」
「ああ……こっち、も……ッ!!」

「ぐぶらっ!!
ん ん ん ん ツツツ——!!!」

喉の最奥、それまでで一番大きい肉棒が喉に突きこまれ、
大量の精液が放たれる。同時にもう一人の男の精液が
凛の顔を盛大に汚していく。

「ああ〜っ…最高だよ、凛ちゃん…ツ」
「おお…っ…たまらんぞ凛…ツ」

男達の肉棒が何度も脈打ち、私の口内が精液であふれかえる。

「…んくっ…ふ、ぐ…こくっ」

むせ返りそうになるのを必死にこらえて、
私は喉を鳴らしそれらを少しずつ飲みこんでいった。



—それからどれくらい時間が経ったのだろう。

唾液と精液にまみれた私の手が、ぬっちゃぬっちゃと淫猥な音を鳴らす。男達はなおもびくびくんと腰を震わせながら、私の胸を時折まさぐる。もにゅんツと掴まれた胸。その先端は、自分でも驚くほどに硬く敏感になっていた。

—私、興奮して…感じてる。こんな、犯されてるのに…

その事実が、熱を持っていた頭の奥と身体をさらに火照らせていった。それがどういうことか理解できるほどの理性は、既に私にはなく。

「ふぁ…はっ、ん…ぴちゃ…ふうっ…」

ずりゅっ、と塊のような精液は口の中でもにゅもにゅと磨り潰し、汁のような水分の多い部分はぺろぺろと舐めてこそぎ取った。



—ああ、まだ、付いてる。
—あれも……舐めなきゃ。

いつの間にか、男達の欲望を受け止めるように身体が求めていた。

—いい子だね。
—いい飼い犬になってくれよ、凜ちゃん。

男達の言葉に頷き従う。
その肉棒は未だ硬く反り勃ったままで。

それから私はさらなる熱を求め…
犬のようにちろり、と——ただ舌を伸ばしていった。



X RARE+



CHIERI OGATA ★

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★



その日はいつもと特に変わらない日でした。
レッスンをし、みんなとお話して…そんなわたしの幸せな日常。

ただその日は、四葉のクローバーがなかなか見つからなかったのです。
薄暗くなりかけた公園の中、ようやく見つけた4枚の葉を掌で包み、
思わずほっとして溜息が漏れました。
きっと明日もいい日になると、そう信じて夕焼け空を見上げました。

——そこで、わたしの意識は途切れました。



「すう……すう……」

「ハア…ハア…つ、や、やっちゃった…」

どさりと、まだ幼さの残る彼女の体をベッドの上に投げ出し、肩で息を吐く。男の興奮は、背徳感のためか、この非現実的な光景のためか。ただ一つ確かなことに、彼の股間のテントはこれ以上ない程に盛り上がっていた。

「な、なあ…これって、けっこうヤバいんじゃないか…」
「今更何言ってるんだ…クスリ使って眠らせてここまで撻ってきて…もう後には引けないだろ」
「だ、だよな……はは…」

この男達は、穏やかな寝息を立てている彼女——緒方智絵里のファンであった。

彼女を応援する彼らの純粋な気持ち。時を経るにつれ、それは徐々に歪んだ劣情へと姿を変えていき。ピンナップや画面に映る彼女の姿だけでは、もう満足できなくなっていた。

彼女を手に入れたい。幼さの残る肢体を、甘く香る体臭を貪りつくしたい。そんな下卑た欲望だけが、彼らを突き動かしていた。

すう…

すう…

震える手で彼女の靴を脱がし、ゆっくりとショーツを引きずり下ろす。
すると肉付きのいい尻が顔を出した。太股と同じく、弾力のある柔らかさと艶が眩しい。

「これが…智絵里ちゃんの…」
「うは…ぶにぶにしてて、やわらけえっ…」

手に吸い付く触感の太股を擦りながら、その付け根の一点に視線が集中する。
誰も踏み入ったことのないその領域に、無骨な指が伸びた。
整った一本の筋が、興奮した指遣いに、ぐにやりと形を歪ませる。

「んっ…っ」

びくん、と彼女の指と眉が動いた。
わずかな反応であったが、驚いた男達は咄嗟に息を潜める。

彼女の寝息を確認すると、再び恐る恐るそこへと指を伸ばす。

「うおお…智恵理ちゃんの、おまんこっ…！」
「お、おい…まだ早くないか」

興奮で雄叫びを上げる男に、傍観する男が焦りの声を漏らす。
しかし夢中で彼女の秘部を弄る彼に、その声は届かない。

「はあ、はあっ…だめだ、我慢できねえ…！」

止める間もなく彼はズボンを下ろし、
限界まで反り勃った剛直を秘裂にあてがうと――

「あああっ…！これが、智恵理の処女マンコお…っっ！！」

男のペニスが純粹無垢なそこを踏み荒らす。

「…ん…ふっ」

今まで不可侵を保ってきた彼女のそこから、純潔の証が滴った。
薄っすらと生え揃った毛が、男の陰毛で隠れてしまうほどの深い挿入だった。

「おいっ、抜け駆けかよ…卑怯だぞ！」

「こんなの我慢できるかよっ…！うあ…締まるっ…！！」



「智絵里っ…！智絵里い…！」

「…はっ…ん…っ」

何も知らず眠り続ける少女を、男は獣のように犯し続ける。
じつくりと、眠っている彼女の膣を肉棒で味わう。

「ダメだ…止まんね…っ！」

「はっ、んっ…んっ…」

男は何度も乱暴に腰を打ちつける。
オナホールでも使うかのような腰遣いに、容赦は一切なかった。

少女の首筋には汗が薄く浮かび上がり、
呼吸も少しばかり速くなっていた。
しかしそのいずれにも、男達は気付かない。

「…あっ、出るっ、智絵里っ…な、膣内にだすぞっ…！！」

一層深い挿入がされた次の瞬間には、男はもう精を解き放っていた。

「ああ…最っ高…ツ」

本能のまま、陰茎の先端を膣口に押し当て、射精の余韻に浸る。

「…あ…ふ…」

静かな寝息をたてる少女の股からは、注ぎ込まれた大量の精液がドクドクと、膣内に収まりきらずに逆流していた。征服欲が満たされていくのを感じ、彼は満足そうに口角を吊り上げる。



——目を覚ますと。

そこには知らない男の人達がいた。

荒い呼吸、滴る汗、そした高揚した頬…
男達の声は、どこか上ずっているようだった。

「…え…あ、れ…わた、し…?」

意識が徐々に、鮮明になっていく。

確か、夕方の公園で四葉のクローバーを探していて…
それが今、何故こんなところにいるのか。

その疑問に答えるかのように、股間の熱い痛みが身を苛んだ。

(え…や、やだ…なに、これっ…?)

現実味の無い光景を前に呆然としていると、
股の裂け目からどろり、と白濁とした液体が零れ落ちた。

「え…え…っ」

「あれ…智絵里ちゃん、起きちゃった？」
「おはよう…ね、寝顔もすごく可愛かったよ」

次々として入ってくる情報に、頭は混乱するばかり。
自分がどういう状況にいるのか、いまだ理解できないでいた。

「…お、おにいさん達…ま、前に…ライブ、で…？」
「うわ…覚えててくれたんだ？嬉しいなあ」

男達の顔には見覚えがあった。
観客席で一際熱狂的だった男達だ。その騒ぎぶりは
スタッフが止めに入るほどで、恐怖感と共に記憶に残っていた。

すると突然、男が少女の尻を乱暴に掴んだ。

「ち、智絵里の声聴いたら、また勃ってきちまったよ…
はあ、はあ…も、もう1回挿れるぞっ…！」

「え…？い、いやっ…離、して、くださいっ…！」

「っっっ!?!」

少女は力づくで拘束され、男の肉棒を迎え入れた。
男性の無骨な体が、まるで壁のように迫ってくる。

「くぁ…締まるっ…最高だよ、智絵里い…!」

「やっ…あ…いた…い…!なん、で…こん、な…っ!」

男から漏れる言葉に、背筋が凍る。
思わずその男の人の顔を見てしまい、吐き出そうとした息が詰まった。
歪んだ口角に、どろどろと濁った瞳。同じ人間とは思えないほど恐ろしかった。



「ひんっ…！あっ、あっ…！い…やあ…！」

肉がぶつかり合い、弾ける音が響く。
細くて小柄な少女は抗う術もなく、男の為すがままにされていた。
腰が蠢き、奥に到達したかと思えば引き、また勢いをつけて叩きつけられる。

「はんっ…！ひう…！あ…んっ！」

「ははっ、感じてるのか…智絵里い…？膣内がきゅうきゅう締め付けてくるぜ…ッ！」

「や…そん な…ア…っ！」

少女の心とは裏腹に、身体は生理的な反応を示していた。
男の精液と少女の愛液が入り混じり、粘質な音が部屋中に響き渡る。

「お…ねがい…です…っ…もう、こんな…や、め…ひうっ！」

「ああ…な、涙目の智絵里ちゃん、そそるわあ…
そ…そろそろ、こっちも頼むよ、な？」

少女の言葉などには全く耳を傾けず、もう一方の男が
怒張した肉棒を彼女の顔へと近づけていった。

「んっ、うっ！？」

「うあ、智絵里ちゃんのロマンコおっ…っ！！」

喘ぎを止め処なく漏らしていた口へ、その男の肉棒が突き挿れられた。

「ふぐっ！ん んぐ…！」

「おっと、に、逃がさないよ智絵里ちゃん…くおっ！」

少女は必死で逃れようとしたが、髪を掴まれて引き抜くことが出来なかった。酸い臭いが口に、鼻に、肺に、胃に、あらゆる場所に刻み込まれる。何度も吐きそうになるものの、口内を蹂躪してくる肉棒がそれを許さない。

「んっ！ふっ、んぶううっ！」

「ああッ…智絵里ちゃん、フェラ上手だね…！喉の奥が絞めつけてくる…うッ！！」

「えふ、ふぐっ…！ふう…ぐぶ…っ！！」

勝手な事を言いながら、男は少女の喉奥を肉棒で何度も突いた。まともに呼吸もできず、少女の意識は蕩けだして朦朧としてくる。

この身体の異常自体に膣内もまた収縮と弛緩を繰り返し、腰を振る男の肉棒に絶妙な快感を与え続けていた。

「おおおっ…！出る！また出るよ智絵里い…！！」

「くう…お、俺もこのまま、智絵里ちゃんの口につ…！！」

「~~~~~ツツ!!!!」

激しく攪拌される粘膜と意識に、少女は為す術もなく精を受け入れた。
男達の欲望の塊が、身体の奥底に吐き出される。

「ふ…!!ん°っ…ん°…!!!」
「あぁーッ…ま、まだ…出る…っ」

肉棒の拍動はなかなか収まらず、精液をこれでもかと流し込み続ける。



「えふっ…！けほ…っ！」

喉と膣からペニスが引き抜かれ、少女は激しく咳き込んだ。

「はぁ…はっ…はは…
ずっとこんな風に、智絵里ちゃんを可愛がってあげたかったんだ」

「俺らみたいなファンをたっぷり悦ばせるのが
アイドルの仕事ってもんだ…なあ、智絵里？」

少女の悶える姿に男達は一層の興奮を示し、自分勝手な都合を語る。
その股間で妖しく光るそれは未だに反り勃ち、その凶悪な威容を示していた。

(わた、し…ファンの、人…よろこんで……)

かろうじて肩で息をする少女の脳裏では、
恐怖とはまた違う、不思議な感情が芽生え始めていた。

その後も男達は、休むことなく少女を騷り続けていた。

「んっ…ふ、ぐっ…んっぶ…むっ…」

「ああ～智絵里ちゃんの膣内、何度挿れても締まるわあ～～」

「ちゃんと香も使えっての…！喉の奥まで…おら、こうやるんだよっ！」

もはや少女は涎と共に濁った嬌声を吐き出す便器に成り下がっていた。
閉め切られた個室。今が朝なのか、昼なのか、はたまた夜なのか。

そんな何もかもが不透明な場所で、少女の嗚咽と、
むせ返るような精液の臭いがあたりをたちこめていた。

「あ…そろそろ、またでる、でるっ…」

「それじゃこっちもっ…おらっ！おらあっ！」

「んっ おっ、おっ！んほおっ！」

少女の頭を、尻を、乱暴に振り回す。
男達が果てようとしていることを知ってか知らずか、
無意識に少女の身体もまた締めりを強めていった。

「んっ————っ……！！————っ……！！！！」

もはや何度目かもわからない射精が、少女の肉体に響き渡る。

「ぐっ…ふぐりっ…」

いつ終わるのか、何度犯されれば解放されるのか。
先の見えないこの地獄で、少女が絶り付けるのはもう、

(あっ…せーえぎ…で、てる……
わた、しで…よるこんで、くれて…る……)

身を焦がし続ける、熾烈な悦楽だけだった。



どれくらいの時間が経ったのか。

男たちのちんぽで犯され続け、スペルマを子宮にも胃にも詰め込まれ。
いつしか少女の中で抵抗の意志は消え去っていた。

「…なあ、流石に飽きてこねえ？」

「確かに、締めりも悪くなってきたし…おいとまする頃合かね」

「…え…っ…？」

男達の言葉に、少女は安堵よりも恐怖を覚えていた。

やっと終わる。解放してもらえる。
それは少女が待ち望んだ瞬間であったはずなのに。

—やだ。
—わたしを置いていかないで。わたしを—

「—みすて、ないで…」


精液と共にか細く漏れ出した声が、男達に届く。

「なんでも…します…っ…
どんなこと、しても…いい、です…から…っ」

見捨てないで。
そう言って、おまんこを2本の指で開き、すっかり解れきった褄を見せる。
お尻をいやらしくうねらせ、少女は精一杯のセックスアピールをしていた。

「もっと、もっと…おちんぼくください…
智絵里を…道具みたいに、お便所みたいに扱ってください……」





そこにはもうアイドルではない、ただの淫売がいた。
少女の様子を見て、萎えていた男達の陰茎ががびくり、と反応する。

——…あっ…よろこんで、る……♡

少女の頬が思わず喜悦に歪む。
次の瞬間には、少女のお尻に太い五指が食い込んでいた。

あ、と歓喜の声をあげようとして、それは濁りきった喘ぎにかき消される。
そしておちんぼが子宮口まで突きたてられ、交尾が始まる。
その瞬間、少女は確かに、幸せを見つけたのだった——



X RARE+



KANAKO MIMURA



まわりのアイドルは、細くてスラっとした素敵な人ばかり。
その中で「ぽっちゃり」なんて言われ、いつも負い目を感じていた。
でもこんな私を、アイドルとして見出してくれて、
好きだと言ってくれたPと、私は恋人になった。

大好きなPのためだったら何でもしてあげたい。
Pに求められたら、その、え、えっちなお願いも、嬉しくなる。
だから今日も、いっぱいPに喜んでほしかった。
私が望むのは、ただそれだけだった——



「ほ、本当に…撮るんですか？」

「ああ…俺はかな子の全部が欲しいんだ。だめかな？」

「うう……」

ぎしり、と揺れるベッド。

色とりどりのお菓子のクッションに囲まれた可愛らしい部屋に、
撮影で使った衣装を着せられた私と——ビデオカメラを持つPがいた。

「ぜ、絶対、人に見せないで下さいね…？」

「勿論だって。かな子に会えなくてさびしいときに見て楽しむから」

「そっ……それも、恥ずかしい、です…」

甘い香りに満ちたその空間に、無機質なカメラの音が響き渡る。
緊張と恥ずかしさから、胸の鼓動が少しずつ高鳴っていった。

「じゃあ…服を持ち上げてくれるか、かな子」

「う……は、はい…」



言われるがままに、薄い服をたくし上げる。
ぷるんっ、と露わになった胸にかあと顔を熱くさせながら息を吐く。

「おお…かな子はやっぱり、おっぱいも可愛いな」
「んっ…は、恥ずかしい、ですう…」

息をのむたびに胸がふるりと揺れて、ぞわぞわと頭の中が熱くなる。
熱を逃そうといやに艶っぽい吐息が出て、かあっと全身が火照る。

「撮られてて興奮してる？すごい色っぽい」
「や、やだ…そんなこと、ない…っ」
「本当かなあ？触って確かめてみよう」

Pの声にドキんと胸が鳴り、その先端にPの指が触れる。

「んっ…！ふあ…や、あっ…」

唐突な刺激に声と吐息が漏れて、身体が熱くなった。

「感じてるかな子、可愛いよ。乳首も硬くなってこりこりしてる」
「や、っ…んんっ、はずか、し…ひやう」

もにゅん、と柔らかさを確かめるように優しく触れられ、
くにゅん、と押しつぶされるように揉まれる。
ちるちると先端を舌で舐められて、ちゅうちゅう、と唇で吸われる。
淫くような感覚とともに、びくびくっ、と身体の奥が震えた。

「ふや、んっ、あっ、っ、くら、んんっ」

Pが乳首を弄って、舐めたりするたびにピクンッと身体は快感を受けて震えた。
身体の奥が快感を求め始め、じわあ…と下半身が熱くなる。

「かな子……濡れてきてる」

「ふあ…っ…やあ…んんっ…」

Pの指が下着ごしに秘所へと触れて、その入り口を弄る。
秘所からは愛液が零れ、下着をねっとり濡らしてゆく。

下着を秘所の形に擦られ、秘所の入口を何度も責められて。
その度にひくひくと腰が動き、快感を求めてうねり出す。

「かな子……腰、上げて」

「ふあ、い……」

じわあ……

ちががががが

は……ッ

は……っ

ちがががが



濡れてしまった下着がPの手でするりと脱がされる。
露わになった秘所にPの指があてがわれ、ずいゆっ、と押し入ってきた。

「っ……あつ、ゆび、はいっちや…はあ、んああ…ツ」

にちゆっ、と粘質な音に膣がピクンツと震えて、
それを迎え入れるかのようにと愛液が溢れ出す。

「かな子、気持ちいいのか？奥からどんどん溢れてくる」
「やあつ、ああつ、んんツ」

Pの指が秘所を出たり入ったりするたび、
泡立つかのような快感が全身を溶かしていく。

「やあ…だ、だめっ、ぶる、でゆ、さ…わた、しっ…！」
「ああ…そのままイっていいぞ、かな子」

乳首は痛いほどにこりこりと固く尖り、
快感が思考と理性を消していく。そして—

ぬ
ぢ
ぢ
ぢ

に
ぢ
ぢ
ぢ

た
っ

ん
ん

「あ、あら、ッ、いっ——んんんつつツツ」

膣内を一際強く撫で上げられて、絶頂が一気に身体を走り抜けた。
びゅぶっ、びしゅっ、と秘所から潮が溢れていく。

「はあ……はあ……んあ、っ」

「かな子……」

「ぶる、でゅ…き——んん む…」

口づけを交わすと、甘い快感が全身に広がる。
Pの荒い呼吸が興奮していることを知らせていた。

ちゅく、ちゅぶっ、と唇や頬、首筋にその痕を残されて、
唐突な刺激が、一気に身体の中を貫いた。



「ひあ——!?ひうん、ふっ、ああッ……!!」

絶頂で敏感になった感覚が、再び快感へと誘う。
だらしなく開けた唇からは唾液がぬっとりと垂れる。

「は、あ……ごめん、かな子……我慢できなかった」

「ひッ、ア……ツんっ……お、くら……はいつ、で……」

視線を動かすと、Pの太くてかたく勃起した肉棒が
私の中へと埋まりこんでいる。
その事実が私の身体をぞくぞくと喜ばせた。

「どうなってるか、自分で言っとらん?」

「あっ……ふ、Pの……お、おち……ちんが……
かな子の……お……おま……こ、に……はいつて、ます……んら」

Pのそれが入ってくれば迎え入れるように柔らかく、
出ていこうとすれば借しむように吸い付こうとする。
埋め込まれた愛おしいPの肉棒をただ身体が求めていた。

「はっ、んんっ、ちゅ、んあッ、はっ、ふっ、う…♡」
「かな、子…かな子っ」

Pの腰がただ快楽を得ようと叩きつけるように動き、その先端が子宮の入口をどっつ、と叩くたびにびりびりとした快感が背筋に走る。

「かな子のグラビアを見て…ファンはこんな妄想もしてるだろうなっ…」

「う、あんっ、や、んんあっっ♡」

「…は、くっ…想像して興奮したのか？締まりが…ッ！」

「あっ、そっ、そんなっ…やあっ、んッ、んむ、ふむうっ…♡」

互いの口内を蹂躪し合うかのように、舌を一心に絡ませ合う。溢れるままに唾液を交換し、それを潤滑油に更に快感が増していく。

「んちゅあ、んっぶっ…っはああんッ、ひあんッ、ふあ♡」

Pが私の腰を片手に掴んで、腰の運動を早めていく。その手にじー、と動くカメラが視界にぼんやりと映って、先ほどのPの言葉がぞくぞくと身体の奥を震わせる。

ぞわぞわと子宮の奥がナニかを求めるように蠢いて快感が再び絶頂を呼び出す。

「だすぞっ…かな、子……っあ！！」

「ひあっ、ひやうっ、やあ、あんっ、んんっ……～～～～つつうりッ♡」

細かく脈動を始めていたPの肉棒がびくんと大きく震え、熱くて固い塊が私の最奥へと一気に流し込まれる。

一度、二度、三度、と、私の膣に誘い出される形で、Pの肉棒から精液が吐き出された。それが私の子宮を熱く満たしていく。

満たされていく熱と安心感に身を任せて快感に酔いしれた。



「は……あッ……ふ、っ……あ」

引き抜かれたPの肉棒に合わせて、ごぼっと精液が零れた。
愛液と精液がつつつ、と太ももを垂れていく。

まだ硬い肉棒をぼうとした意識で眺めながら
——申し訳なさそうなPの顔に気が付いた。

「……ごめん、ごめん……かな子」
「ふ、え……ぷる、でゆーさ……？」

グ
ッ
ッ
ッ

は
あ
……

は
……

——がちゃり、と開くドア音ともに見知らぬ男達が入ってくる。
肉棒を勃起させ、カメラを構えたまま、Pはなぜか私から距離を取った。

「やあやあ、中々いい絡みだったよ。やっぱりいいね、若い子は」
「とろとろに濡けてるねえ。実に良い色だ」
「え……？」

「ふ、ぷるでゅーさ……あ、あの、これは……」

理解が追い付かないまま、入ってきた男達がかな子を取り囲む。
男達は一様に裸で、その股間には隆々と肉棒がそそり立つ。

「はは、かな子ちゃん。
君たちの絡みはね、あのカメラから全部見させてもらってたんだよ」

「え……えっ……？」

「……」

答えを求めるように向けた視線にPは応えてくれない。
代わりに答えたのは、私にのしかかるように身体を押し付けてくる男。

「ネトラレ……なんてまあ知らないかな？
恋人を他人に奪い取られるって意味なんだけど……
……そこのPくんは、それが大好きな歪んだ性癖だね」

男の肉棒の幹の部分、敏感になったままの秘所に擦り付けられてぞくぞく、びくびくと身体の奥が震えてしまう。

「や……あ、んんっ、ふ……う、あっ」

「つまるところ……寝取ってもらえないか、と誘われた訳だよ。
かな子ちゃん、君をね」

肉棒の先端で秘所が引っ張られ、捻げられる。
男は下卑た笑みを浮かべ——身体を密着させて、腰を押し出した。

「ふあ……！？ん、ふっ、つやあ……いやあ」

P以外の男の肉棒を、私の身体は一気に奥まで迎え入れた。
ちかちか、と視界が点滅して霞む。
子宮が勢いよく叩きつけられて、Pの精液を押し出す。

「Pくんの精液が溢れていっちゃうね？
このまま全部取り替えちゃおうか、おじさん達の精液にね」
「ひッ、アツんっ……や、らあ……」

押し入れられた肉棒はただ快感だけを与えてきて、
私はそれに耐えられず声を荒げていた。

男の腰が前後して子宮が何度も叩かれると、
敏感になった私の身体はその快感に震えてしまう。

「はは…気持ちいいのかい、かな子ちゃんっ…？
ぎゅうぎゅうと締め付けてくるよ」

「ふあ、んッ……ん、ふっ、つあ、ひあ……いや、やっ…ひんっ」

愛液を溢れさせながら、男は肉棒を何度も前後させた。
力強く子宮を突く肉棒に、ぴりぴりとした電気が身体中に走る。
目の前が真っ白になり、身体は快楽を貪り始めていた。

男の腰の動きが、私の身体を押しつぶすように愛撫する。
押さえつけられた胸はその先端を甘く抓まれ、
酸素を求め開いた私の口に男の指が侵入してくる。

「ん、ぶっ……ちゅ、んちゅっ、は、んあ……れりゅ、る、んちゅ…♡」

—Pのより、おっきくて、キモチ…イイ。

今まで感じたことのない快感が、身体を満たす。
Pの温もりが全て上書きされてしまうほどに
強く疼く快感が意識を自く染めていく。

「ふっ、あ……お、くっ、ひっ……うんっ、あっ、こ、われ……アんっ♡」

「奥が好きなんだね…突かれる度にヒクヒク感じているよ」

「ア、んあ、ちゅ、あ、ひ、ふ、んあ♡」

男の指先が私の口の中を蹂躞し、舌を指で弄る。

身体は既に快感で蕩け、肉棒が子宮を叩くたびに
悦びに震えてさらに深く迎え入れようと甘く疼く。

「はあ、はあ……もの欲しそうな顔がたまらんな。
…このまま膣内に出すよ、いいね？」

「っ、やっ、やらあっ、や、んあっ、ぎやう、ああっ…！」

言葉とは裏腹に、男の動きにあわせるように弾む身体は
その乳首を痛いほどに立たせて快感を待ち望んでいた。

「い、やあ、や、くあつ……ひ、う、んあ、ツあ……〜〜〜ツツ♡」

—目の前が真っ白になる。

一番奥まで突き入れられた肉棒はまるで噴水のように熱い塊を吐き出して、掻き出されたPのそれと混ざり合って満たされていく。

「おお……つ……まだ、で、る……ツ！」

「あつ……ア……はッ……♡」

収まりかけた肉棒の拍動が一旦止まったかと思うと、男の精液で満たされた私の子宮へ最後にまた射精した。

頭の奥も身体の中も全てが甘い快感で満たされて、自分の吐息と男の吐息が混ざり合う。

その熱さに身体の奥が震え、私は再度絶頂を迎えていた。



絶頂の波が収まって、ぬぷぽっ、と男が肉棒を引き抜く。

「いやあ、出した出した。我ながら凄いだね」
「もうなくなっちゃってるんじゃないですか、彼氏さんの精液」
「いいねえ。それでこそ、寝取っている感じがするよ」
「や……あ……ひ……っ……」

精液に塗れたそれを目にして、私は改めて理解した。
P以外に抱かれてしまった、と。

かるうじて残る理性が、助けを求めるようにPを探す。
そこには――

カメラを構えたまま、必死に自慰行為にふける、彼がいた。

「ああ……かな、子……はあ、っ……！」

握られた肉棒は、私との時よりも大きくそそり勃っていて。
何度射精したのか、ぬちゃぬちゃと自く染まった手が
ただひたすらに粘質な音を奏でていた。

それから、男達は次々と私を犯していった。

「あうっ、あっ…あ…んツ、んああっ、っはあッ、やああッ♡」

ドロドロに濡れて精液に塗れた秘所に、
何回目かもわからない肉棒を突き入れられる。

どりゅどりゅっ、と子宮の入口を肉棒でこじ開けられて、
身体の奥が快感と歓喜に打ち震える。

「やあっ、まっ、まらっ、まらいぎッ、そうっ、んあっ、んんっ、んひッ♡」

快感を求めるように男の腰に脚を回し、無意識に腰が動いていた。
子宮を勢いよく叩かれて嬌声を上げながら快感をただ貪っていく。

「イクぞ、かな子ちゃん……Pくんの目の前で、
たっぷり濃いのを膣内出ししてやるからな……うぐうっ!!!」
「うあっ……こっちも——ツツ!!!」

「うんっ…わたっ、わたひもツ……いっくらうら～～～ツツ♡」

脈動する肉棒から、本当に塊のような精液が私の子宮にと叩き付けられる。


まわりの肉棒も大きくびくんと震えたかと思うと、一気に精液が放たれて、私の肌を白く染め上げていく。

べちゃっ、とお腹や顔を染めていくそれはとても熱くて、その熱で絶頂を迎えているというのにまた身体を震わせた私は、ぼうっとした頭のまま、目の前にあった男の唇にキスをした。

そんな様子を見ていたPの肉棒からもまた——精液が放たれる。

——Pが、悦んで、気持ち良くなっている。

そう思うと、身体がズクンッと疼いた。名前も知らない男達と、深く舌を絡ませていく。そしてあてがわれていた男の肉棒を、自ら求め始めていた。



また、犯されちゃう。また、膣内に射精されちゃう。

でも、Pが悦んでくれるなら、それでいい。
もっとPに、気持ち良くなってもらいたい——

頭の中に響くその感情だけを頼りに、
ねだるように、男の腰に脚を絡ませていく。

「もっと…かな子をいっぱい、犯してください…♥」

私はそう微笑みながら、男達を誘うのだった。


X RARE+



UZUKI SHIMAMURA ★★★★★★

夢が、やっと叶った——

オーディションに受かって、アイドルになれて、
吐いた息の隙間を埋めるようにして染み込んで来たのが、そんな言葉。

歌も踊りもまだまだ未熟だけれど、毎日が充実した日々。
元気と笑顔が自分の取り柄、そう言い聞かせてここまで頑張ってきた。
いつかどこかで、記憶はもうおぼろげだけれども、
自分の笑顔がいいと言ってくれた人の言葉が、私を支えてくれる。

だから今日の仕事でも、笑顔だけは忘れずにいよう。そう思っていた。
…思っていた、のに。



「じゃあ今度は、両足を開いてみようか」
「はいっ、足ですね♪……へっ？」

撮影も順調に進んできた頃。
魚眼レンズの向こう側の声が少し浮ついた気がした。
それまでと少し異なる要求に、思わず息を呑む。

「え、えっと…こう、でしょうか…？」
「そうそう、はい笑ってー。
そのままいつものアレ、やってみて」
「は、はい…びっ、ピースですっ、ぶいっ♪」

1人には大きいベッドの端に座り、
戸惑いながらも言われたポーズを取る。
大きく足を開いて、股座を突き出す格好になっていた。

「(うう…恥ずかしい…)」

あまり人には見せられない姿勢の自分に、頬が赤くなる。

しかし新人がワガママを言う訳にはいかない。
この仕事を取ってきてくれたPにも迷惑がかかってしまう。

「(島村卯月…が、頑張りますっ)」
「お、いいねーその笑顔。もっと頂戴～」

強張った笑顔にフラッシュの光が浴びせられる。
やがてシャッター音が落ち着くと、カメラマンが口を開いた。
それは自分に向けられたものではなく――

「…よーし。これならいい画が撮れそうだな。
おい、もう入ってきていいぞ」

彼の言葉を合図に、複数の男達が無遠慮に部屋に入ってきた。
しかも男達は、その身に何も纏っていないかった。

「え、ええっ、な、なんでっ…え、は、はだ…っ!?!」

男性の裸なんて、父親以外見たことがない。
次から次へと目まぐるしく変化していく現状に、
当然とも言える疑問を口から搾り出すので精一杯だった。

「ひゃうっ!?!」

そして男達は卯月を取り囲むように集まった。
彼らの股部から生えているソレが、顔のすぐそばに寄ってくる。

「あっ、あああのっ、こっ、ここ…これ、ち、近い、ですっ…」

今まで見たことのないモノに視線が釘付けになる。
ソレはドクドクと脈を打ち、時折びくんと震えていた。

「あれ、卯月ちゃんもしかしてこれ見るの初めて?」

男の問いに、こくこくこくっとならぶ必死で頷く。
しかしそんな卯月の初心な反応に、男達は一層盛り上がる。

「へえ～初モノってのはマジだったんだな」

「やべっ興奮してきたわ」

「おい早く始めるよ。後がつかえてんだ」

男達から、けたたましい笑い声が聞こえてくる。
その言葉の意味を理解する余裕は、今の自分にはなかった。

状況がよく理解できないまま、撮影は再開された。
なんとか笑顔を作るものの、明らかにぎこちないのが自分でもわかる。

「卯月ちゃん？ちょっと笑顔硬いよー」
「は、はひ…っ」

顔の傍に添えられた男性器が気になって仕方がない。
びくびくと動くそのグロテスクな姿に思わず悲鳴を上げそうになる。
臭いも酷い。なんとも形容しがたい、酸い悪臭が鼻腔をつく。

(が、頑張らなきゃ…でも、うう…)

今はただ早く終わらせようと、肉棒を尻目に必死に笑顔を作り続ける。
しかしその思いとは裏腹に、カメラマンは新たな要求を提示する。

「卯月ちゃんさ、暑くなってきたし、上、脱いじゃおっか」
「へ…っ？ぬ、脱ぐ、って…」
「あ、じゃあ俺やりますよ。ブラも外していいっすよね？」
「ひゃっ…あ、あの…待ってください…」

突然の事に抗議の声を上げる。
しかし男の強引な力の前に成す術はなかった。

ブラジャーもろとも衣装を脱がされ、ぶるんっ、と弾けるように飛び出した胸があらわになる。

「はうう…っ」

自分だけが置き去りにされているこの状況に、ただか細い悲鳴を上げることしか出来ない。

「ほらほら笑って～。卯月ちゃんの可愛い姿を余す所なくいっぱい撮らないとね」

その間もカメラのレンズは這い回るように、自分のあられもない姿を捉え続けている。

「ひゃんっ！？あ、あのっ、や、ん…っ！」
「うっは、卯月ちゃんおっぱいおっきいねえ」
「ああ、形も綺麗だし最高だわ」

突如まわりの男達が無遠慮に卯月の胸を揉みしだいてきた。

「あれ、乳首カタくなってんじゃん」
「卯月ちゃん感じちゃってるの？案外ノリノリだね～」
「ふえ…かん、じ…？ひう…っ」

戸惑う卯月を男達が思い思いに弄ぶ。寒気にも似た感覚が背中を撫で、ぶるりと体を震わせる。

「は～いそのまま、もっと大きく股ひろげて、ピース！」
「はい…ふ、ふい、っ…」

気付けば、下着を脱がされ陰部もあらわな姿のまま、撮影はなおも続いていた。

「あ～卯月ちゃんのおっぱいまじやわらけ～」
「別に減るもんじゃないし、いいよね？」
「このほうが卯月ちゃんの緊張もほぐれるよね」
「ひんっ…あ…は…はい……んっ…」

男達はなおも好き放題卯月の胸を弄り回す。
もはや卯月は抵抗もせず、早くこの撮影が終わる事だけを願って、かるうじて笑顔を保っていた。しかし――

「もうそろそろ、いいんじゃないっすか？」
「俺ら、もう我慢できないっすよ」
「…そうだな。それじゃあ『本番』いってみようか」

「…ふえ…？」

「あ、あの…まだ、なにか…するんです、か…？」
「いいからいいから。気にしないでそのまま」

別の男が自分の下に入ってくる。男の怒張した肉棒は激しく脈を打ち、
独特の硬さが尻から太股にかけて触れ、否応なくその存在を意識させられる。

「(お、おっきい…)」

自分の腰の下のモノを見て、率直な感想はそれだった。

「それじゃ卯月ちゃん、いただきます」

「へっ…？」

がっしりと腰を掴まれ、周囲の熱気が増す。
本能が警鐘を鳴らし、思わず抵抗しようとした瞬間

ズボン
ズボン

ドキッ



「んううっ——!!!?」

ぶつり、と何かが裂ける音を聞いた気がした。

「おっほ…キツキツだ」
「やっぱり処女か、ちきしょーいいなあ」

何が起きたのかわからない。
無理やり裂かれたような、堪えようのない痛みが下腹部を支配していた。

「…っ!?はうっ…こ、これ…ひんっ…!!」

他にもない自分の股座から滲み出る血を見て、我に返る。
自分の大切な場所にずっぽりと入った、大きな肉塊に気がつく。

「(なん、で…!?こ、んな…っ)」

もはや痛みで悲鳴を上げる余裕すらなく、
ただ酸素を求め口をばくばくとさせる。

そんな卯月をよそに、男は腰を動かし始める。

「おお…めっちゃ締め付けてくるわ」
「ひ…やあっ…!!うご…か、なあ…でっ…!!」

形が、わかる。
陰茎の固さが膣を通して、痛みと共に脳髄まで上ってくる。
自分のそこは今、くっきりとこの形に変えられていた。

「ひらっ!や、やめえ…!いた、いい…!はうんっ!」

何度も突き上げられ、尻と腰が打ち合わさり、ぼつんと音が鳴る。
二度、三度と長めの感覚を置きながら膣内が刺激されていく。

「うわこのアングルえっる…卯月ちゃん、尻もデカイとか才能あるわ」
「たまんねえ…一発シヨっとくか」
「お…俺も」

横の2人が肉棒を抜き始めると同時に、
秘裂を押し広げる怒張もまた、その動きを激しくする。
徐々に容赦がなくなっていくピストンに、
自分のそこは痛み以外のものも感じ始めていた。

「ひあっ!んっ、ふあ、はんっ…!」

食いしばっていた口は徐々に開きかけ、
鼻にかかった喘ぎが僅かに声に混じり始める。
尻を揉みしだくように掴まれ、膣壁を硬い肉塊で擦り上げられ、
悲鳴とも嬌声ともつかない声が、自分の意志と無関係に漏れ出す。

「おおっ…もう出そうだ…!」

男の唸る声が聞こえ、一層動きが激しくなった次の瞬間――

「ひああああ——っ!!!」

下腹部に、顔に、熱を感じた。

熱い。ひたすらに熱い。
男達の肉棒が、どくどくと脈を打ち、震え、破裂する。

「んあっ…! やあっ…! はっ……!」

逃れようにも、腰を掴まれていてただ腰を振るだけになり、
その動きがかえって男達の精液を搾り取る。

その様はまるで、食欲に男の精を求めているようにも見えた。



「う、そ…? なかに、だされ、で……」

避妊具もなしに、膈内に精を解き放たれる。
それが意味することは、乏しい知識ながらも理解していた。

「あー…出た出た。卯月ちゃん具合良すぎだわ。まだいけそうだ」

「おいおい、次は俺だろうが」

「現役アイドルのマンコ独り占めとか許されないわ」

「ぼっ、馬鹿野郎、俺だろうがよ。どんだけ待ってたと…」

諍いの騒音も、今は耳に遠い。
どこの誰ともわからぬ男に初めてを捧げてしまったこと、
しかも精液を注がれ子種を孕んでしまったことが、
ただただショックであった。しかし――

「…からだか…あつい、です…」

その行為と顔に浴びたむせ返るほどの牲の臭いに、
自分が下腹部を熱く濡らしていたのもまた、事実であった。

打ちひしがれ、虚空を見つめ、放心する卯月の中で、
密かな欲望の萌芽が起きたことを知る者は、誰もいなかった。

――そう、自分自身でさえも。

—それから。

「んああっ…！らめえ…また、イっちゃい、ますう…！ひううん…！」

とうに品など捨て去った嬌声が、部屋中に響き渡る。ペニスに押し広げられたそこから滴るものは、幾度となく注がれた精液だけではなかった。

攪拌され尽くして泡立った愛液、すっかり薄くなった破瓜の血、あらゆるものが混沌として混ざり合っていた。

「あっ、あは…んう—っ！！」


背中を反らし、もう何度目かの絶頂にその身を震わせる。それと同時に、精液が解れきった子宮を侵食してくる。

最早細胞の一片までスペルマ漬けとなった膈は、勢いある射精に歓喜してひくひくと痙攣を続けていた。

魚眼レンズは相も変わらず、自分の姿を捉え続けている。その奥に焼きついた自分の姿は、どのように映っているだろうか。

「…あは…♪」

言葉よりも雄弁に語る物証が、そこにあった。



レンズ越しに見据えた男の喉仏がうごめく。
股間のテントは既に限界まで張られており、
解放される瞬間を今かと心待ちにしているようだった。

——カメラマンさんも…したい、ですよ…？

そう言うと彼女は、男のテントを口で頬張り、ぞっとするほど淫靡に微笑む。
その瞳に理性の光はもう、ない。

——えへへ…島村卯月、頑張りまふ…ぶい♪



X RARE+



MIO HONDA
★ ★ ★ ★ ★

わたし、本田未央の今回のお仕事は、雑誌の水着グラビア撮影。
Pが熱心に売り込んでくれたおかげで、やっと取れた大きなお仕事だ。

Pが急遽別の仕事で来れなくなってしまったことや、
スタッフが全員男の人だったこともあって、最初は少し戸惑った。
それでも持ち前の元気と明るさと、スタッフさん達の盛り上げで
不安は次第に無くなっていった。

このまま何事もなく撮影が終わると——この時はそう思っていた。



「いいねー未央ちゃん！いい笑顔だよ～」
「あはっ！いえーい☆」

さんさんと照りつける太陽の下、シャッター音に合わせてポーズをとる。
さやさやと心地いい潮風が目差しを和らげて、垂れる汗も楽しく流す。

「もう少し前屈みで…いいね～グッド！」
「ヒュー、谷間に溺殺されちゃうよ」
「えへへ、ありがとうございますーす！」

スタッフさん達ともだいぶ打ち解けて、
緊張や恥ずかしさはほとんどとれてきていた。

カ
シ
メ
ッ

IP
シ
ャ
ッ

それに気づいてか、カメラマンの積極性も増していく。

「よ～し、今度はもうちょっと近くで撮ってみようか！」

そういえばカメラばかりに意識がいった気がつかなかったけど、
シャツなどを着ていたスタッフの人達も水着姿になっていた。

「(わ…こ、これって…)」

ふと、目の前まで近づいてきたカメラマンのある部分に、つい目がいってしまう。

「はい視線こっちに～」

「あ…は、はいっ」

カメラマンのブーメランビキニ、その膨らみが視界を彷徨う。
ちょっと…いや、かなり近い気がしないでもないけど。

「どうしたの未央ちゃん？カメラしっかり見て」

「あ、あの…少し、ち、近くない？」

「はは、そりゃーアップでほしいからね」

一度意識してしまうと、どうにも気になってしまう。
それに男物のコロンと潮風と汗が混ざり合った匂い。
不意に感じる異性の香りと羞恥に、顔がぼっと熱くなる。

ドキッ



「あれ、どうしたの？さっきの笑顔、もう一回ほしいんだけどな」
「あ、はいっ！ご、ごめんなさーい」

いかん、お仕事お仕事。気を散らさないようカメラを見つめる。
しかし視界から追い出そうと顔を背けても、カメラマンが回り込んで近づいてくる。
そのたびにさっきの匂いを不意に嗅いで、余計に顔を熱くさせてしまう。

「(なんでだろ…この匂い、ムズムズするっ…)」
「うーんどうも落ち着きがないねえ。
おーい、ちょっと後ろから支えてあげてくれるか」

私の挙動に困ったような顔をしたカメラマンが、アシスタントに声をかけた。



「ひゃっ?! えっ、あの、ちょっ」
「大丈夫、大丈夫。ちょっとポーズの手伝いに入ってもらっただけ。
はい、続けて撮るよーこっち見て!」

アシスタントさんが突然、後ろから私の腰を掴んでくる。
硬くてごつごつとした手の平は、私の脇腹をがしりと抑えるように離れない。

「は、はあ……んっ」

くわえて私のお尻に、アシスタントさんのナニかが、当たっていた。
気のせいだろうか、時々こすりつけられるような動きも感じ、
そのソワリとした感覚につい声が出る。

「(——ひうっ…な、なんか動いて、る…?)」
「ほらほら、時間押してるからちゃっちゃといくよー」
「あ、う、はい…」

しかしこれも撮影のためと思うと、何も言えなかった。
何とか撮影を終わらようと、違和感を必死で振り払い
ポーズをとり続ける。

水着越しに感じるソレは次第に大胆になっていき、やがて確信に変わる。

「う、あ…んっ」

—お、ちんちん…押し付け、られてる…っ。

お尻の谷間から圧迫してくるそれは、確かな硬さと熱を持っていて、男の腰の動きが伝わると、それに合わせて私のお尻も上下に揺れる。

「(あ…あれ……なんか、あたまでぼーっとして…)」

じゅんっ、と身体の奥に灯った熱がたびたび背筋を震わせ、男の動きにあわせてますます熱を生み出していく。呼吸は速まり、目の前にいるカメラマンの匂いに熱がさらに高まる。

「…大分効いてきたか。

ほらほら恥ずかしがっちゃダメだよ。笑顔笑顔、笑わなきゃ」

「ふあ……は、い…っ」

男の腰の動きが段々と早く、力強くなっていく。にちゅりっ、ぬちゅっ、くちゅりっ、にちや。アシスタントの動きに合わせて、水音が頭の中を駆け巡る。

「っ…そろそろいいだろ？な…はあ、はあ」

「オーケー。—もう少しで終わるからね—未央ちゃん、深呼吸して、はい、リラックス〜」

「は、はい……ふ—っ」

カメラマンの言葉に従い、身体の緊張が弛緩したその瞬間—ナニかが一気に身体の中へ押し入れられた。

「ひんっ——!?!」

いつの間にか、愛蜜に濡れた水着は下されて、
露わになった秘所に男の肉棒が勢いよく挿入された。

「あれっ未央ちゃん、どうかした?」

「あ、いッ…あの、これ…っ!?!うあ…んんッ!!!」

押し入ってきたおちんちんが私の一番深いところまで進んで、
その先にある固い部分——子宮がある入口をどりっと突き上げた。
それが、興奮で高まった私の身体をぞくぞくっと震えさせる。

「いい顔になってきたね。今にもイきたそうな顔だ」

「あ、んう、あ、ひや、んんっ…ふ、え？」

「はは。犯されてるってのに、快感で頭が働いてないのか」

犯されている——レイプされている。

それなのに快感を感じてしまっているという事実が、さらに身体の奥をゾクゾクさせた。

「あ、や、んっ、ツア、らめ、んんっ」

段々と動きが大きく早くなる男の肉棒に快感を与えられ続けながら、
にやにやとこちらを見下るすカメラマンと視線がぶつかる。

大きく盛り上がったブーメランパンツを顔に擦り付けられながら、
その匂いが快感で自くなってきた意識を愛蜜のようにとろりと溶かしていく。

「ひあっ、ひやうっ、やあ、あんっ、んんっ！」

ごっ、ぐりっ、と男の先端が私の最奥まで手加減無しに力強く入ってくる。

次第に頭も身体も意識も、熱くなりすぎたかのように真っ自に染まっていって——

「っつつっつらッ!!!」

突きこまれた肉棒が一際大きく震えたかと思うと、その先端から熱いモノ一気に放たれ——
それと同時に、私も絶頂の快感に溺れていた。

「っ…あーッ、サイッコー…」

男の肉棒が二度三度大きく跳ねるたびに身体の奥は熱で満たされて、
その度にびくびくんっ、と絶頂の余韻が身体を震わせる。

「あ…ンッ……ら……」

「あれ、もしかして未央ちゃんもイっちゃった?
膝も震えて、今にも崩れ落ちそうだね」

「すげーうねりまくってますよ…まだ吸い付いてくる…っ」

こぶりっ、と。
私の中——子宮と膣に収めきれなくなった熱くて白いナニかが、
溢れ出では太ももを伝って海へと溶けていく。

これが男の人の精液なのかと、
火照った頭でわたしはかるうじて理解した。

「というわけで未央ちゃん、このまま次いくからね。頑張って」

そう言うと、男はそのまま抜かずに腰をまた動かしはじめた。

「ふえ——んんッ!? あっ、や、らッ…!!」

水着をずらされ露わになった胸が、ぶるんぶるんと揺れる。崩れ落ちそうになる身体は腕を取られるように仰け反らされ、反動でさらに深く押し入る肉棒によって、奥に溜まった精液が溢れ出る。

「あ、うッ!んあっ、もう、やらあ…ふああッ…!!」

おちんちんが小刻みに突き入れられ、それを望むかのように身体の奥がきゅんっと囁くのが感じ取れて、その硬さと快感をゆっくりと身体に刻み込んでいく。頭では拒んでも、もはや抗えそうになかった。

「どうも未央ちゃん、お疲れみたいだねえ。それじゃあ前からも支えてあげることになろう」

そう言って、今度はカメラマンの男が水着をずりおろし——そのおちんちんを私の口にあてがった。

「んぐっ!?んら、んんーッ!んぶっ!!!」
「ほら、頑張れ頑張れ。まだまだ撮影は続くんだからね」

カメラマンのおちんちんが口の奥に無理矢理突き入れられ、激しくむせ返る。
息ができずに吐き出そうとするも、唇から押し入ってきて何度となく齧く。

「ぶく、ん、む…!れる、むら…ッ!」
「おお…なかなか上手いじゃないか、未央…っ」

なんとか舌で押し返そうとするが、
その舌先がちょうど肉棒の裏スジを刺激する。
それが男の快楽のツボとなり、かえって肉棒は大きく硬くなっていく。

「レイプされながら熱心にフェラしてくれるとは…
最近の女子○生はエロいな…っ!」
「んら、ひがら…ぶむッ!!むらー!!!」



後ろからピストンで犯されれば、呼吸とともに酸素が掻き出されて喉の奥までも犯される。

呼吸のし辛さに反射的に涙が零れて頬を濡らす。

だというのに身体は正直で、その奥は再び熱を求めて男達の肉棒を受け入れ始めていた。

子宮と口を犯されて、快感と息苦しさが混ざり合って、さっきよりも強い絶頂が込みあがってくる。

カメラマンたちの声が、だんだんと遠くなり――

視界がチカチカと目光に塗りつくされるように真っ白になって、
身体全てが快感を感じるように震えている。

アシスタントとカメラマン、その二人の射精が
絶頂の止めであるかのように、全身に電流が走った。

「ふぐっ—ッ ツ — ツ ツ…!!」

それまでよりも一番に強く深く突き入れられた男達の肉棒から、大量の精液が放たれる。それらは私の子宮を満たして、再びごぶりっど溢れてはちゃぶちゃぶと海へと零れていった。

「おお…そのまま、こぼさずに飲め…ツ」

「ん…ぐツ…ふう…んぶ…っ」

喉奥に放たれた精液もまた、私のお腹の中へと注ぎ込まれていき、溢れ出そうになるそれをこくりっこくりっ、と飲み干していく。

「っ——はぁ…気持ちよかった。いやぁ未央ちゃん、才能あるねえ」
「は、あ……ッ」

愛蜜で濡れたおちんちん、唾液で濡れたおちんちんが口から引き抜かれ。
それになぜか喪失感を感じながら、ぶるっと背筋を震わせた。

「はは、大丈夫…まだまだ撮影は途中だよ。
——まだまだみんなの相手を、してあげなくちゃね」

そう言うと男達は、私の水着を脱がせていった。
快感で敏感になった肌が全て晒されて、
まとわりつくような潮風が全身を舐め上げていく。

視界の隅に、一様に裸になったスタッフたちが映る。
そのおちんちんは硬く熱く反り勃っていて。

——まだ……続くんた。

あの人達にまた犯されるのだと思うと、なぜか
身体の奥がぞわぞわと震えて、また熱を求め始めていた。



「ふぐっ、あむっ、んんっ、ぶはっ…んぶッ」

男達の肉棒が私の中を掻き乱しながら出入りして、擦れる感覚が快感でいっぱいのまま激しく突かれていく。

ぶるんっ、ふるふるっ、とピストンの振動のままに揺れる胸の先端は痛いほどに立ち、さらなる快感を求めている。

そんな胸を器用に揉みしだきながら、別の男が私の口をおちんちんで犯していく。

それぞれの異なる小刻みな動きがもどかしさを生み、身体の奥がますます熱くなっていく。

そうかと思えば、急に口内、喉奥まで肉棒を突き入れられる。

ぞりぞりっ、と犯される感覚と快感が背筋と太ももを震わせ、びりびりとした甘い疼きが小刻みに絶頂を与えてくる。

「んぐツ、んんっ、んふっ、んんんツツツ!!」


背中には後ろから突く男の手が汗に濡れた私の肌をぬるりと蠢き、ぞわぞわと震える私の秘所めがけて腰を打ちつけてくる。

子宮の入り口はヒクヒクツとさらなる熱と快感を求めている、押し入ってきたおちんちんの先端へ愛おしそうに吸い付いていた。

「んぐっ、イふっ、イっひゃふっ…!
わ、わらひッ、まひゃっ、イっくううううう——ツツ!!」

愛蜜なのか潮なのかもわからないものを吹き出しながら、男達の欲望のままに私は再び絶頂を迎えていた。

幾度も、何度も放たれた精液はもう私の中へ入りきらなくて、溢れだした精液はぼちゃぼちゃ、と海の中を犯していった。



—それから。

「はう…んっ…あ…♡」

おちんちんを突き入れられたまま精液に口元を塗らした
顔を持ち上げられ、にやりとカメラマンが笑う。

—また……してもらえるんだ。

潮と精液と愛蜜と、その全てが混ざり合った匂いに塗れたまま、
ぞわりと身体の奥が震えて。

まだ見ぬ快感を、心の何処かで期待している私がいた——。